

【市民キャビネット農都地域部会 食・農・環境 講演会】報告

『有機農業・農産物の“いま”を知る』パートⅡ

開催日 : 2015年10月20日(火) 18:00~20:40

会場 : 港区神明いきいきプラザ 集会室A

1. 「有機農業の現状と課題」

久保田裕子 氏 國學院大學経済学部 教授

(1) 有機農家 12,000 戸の 3 分の 2 は有機 JAS 認証を取得していない。世界的に見ても、有機農家の半数以上は、有機 JAS のような第三者機関の認定を取っていない、地域で小規模の有機農業をやっている。IFOAM (国際有機農業運動連盟) では、それに見合った表示制度を整備していくべきだ、ということになり、世界各地や日本の実態も踏まえ、できたのが参加型保証システムである。

(2) TPP 大筋合意になり、世界最大の自由貿易圏が誕生し、輸入農産物がますます深刻な形で入ってくることになる。

日本は 1960 年代、農業の近代化が進められた— 化学合成農薬と化学肥料の大量使用、機械化・施設化などで、生産効率一辺倒の農業を官民挙げて推進してきた。その結果が、農薬公害や環境破壊を引き起こし、それへの反省・批判として有機農業が出てきた。また、都市化で小規模農家は都市に吸い上げられ、農村の荒廃が進んだ。有機農業は、未だ、農業全体の 0.47%、耕地面積では 0.36%、というお寒い状況にあるが、グローバル化が進む中では、いっそう拡大していくべきである。

(3) 1999 年に当時・農林物資の規格化及び品質表示に関する法律 (2013 年、食品表示法の制定により、農林物資の規格化等に関する法律と改称) (略称 JAS 法) の下に有機 JAS 検査認証制度が導入された。これは、食品の表示規制の制度であり、有機農業推進法ができたのは 2006 年であるので、表示規制が先行して、しかも有機農産物は一般的な食料品の一つとして矮小化されて入れられてしまった。

店頭に並ぶ食料品の表示に虚偽がなく、信頼の持てるものであることは重要なことなので、こうした有機 JAS のような表示の規制制度は必要であり、否定されるものではない。ただ、その導入の経緯や第三者機関による認証というような性格は、特に有機農業生産者の側からすると歓迎されているわけではないということであろう。

日本の有機農業は、生産者と消費者が直に顔を合わせて直に話をし、畑の上で話を交わしあい、生産者と消費者が提携することで、各地に定着してきた。有機農業の「提携」(産消提携)とは、「農家と消費者が共に学び支え合う相互協力・信頼関係のもとに、食べものをつくり・はこび・食べる継続的な取組み」であり、生産者と消費者と一緒に協力して有機農業を進めようというものである。その後の有機農産物などの宅配事業や小規模の自然食品店なども、こうした取組みから派生したものも多い。有機 JAS 制度ができて、3 分の 1 しか取られていないというのは、こういう経過があるからとも言えよう。

(4) 農業は既に世界的なレベルの取引や流通になっており、有機農業運動からみると、その対立軸は、グローバル・フード・システムか、ローカル・フード・システムかと捉えることができる。有機農業の世界でも、多国籍企業が支配したり、大企業が有機農場を買収したり、という動きが米国やフランスで既に進んでいるが、有機農業運動としては、ローカルな地産地消、地域自給をめざしたい。自給についても、まずは家族の自給があり、その上に地域の自給、流域の自給、そして国の自給というように、身近なところからの自給を考える、地域に根差した自給のあり方を考えるようにしたい。

(5) 国レベルの自給から考えると、大量に、効率よく生産しようということになり、すると、農薬や化学肥料を大量使用したり、遺伝子組換えを使ったりということになりかねない。対立軸としては、生産主義（生産効率主義、生産第一主義）か、それとも健康や環境、安全、自然との共生か、ということになるだろう。生産主義はモノカルチャー、遺伝子組み換えになってしまう。

有機農業が目ざすのは、単に有機栽培という農法だけにとどまらず、地域自給や生産者・消費者の提携などであり、それらを踏まえた生物多様性、少量多品目生産、種子の自給、伝統的農業を踏まえた科学技術（この場合は、例えば、微生物がどのように働いているか、というような人々のための科学）を活用した、総合的な有機農業を進めるのがよい。

(6) 農薬や遺伝子組み換えに関しては、現時点では問題ありというデータが不十分であっても、ひとたび問題が起きたら取り返しがつかないような環境問題、食品安全問題には、現時点において予防的な措置をとる「予防原則」を適用すべきであり、有機農業もこの考え方で行われている面もある。

TPP などグローバル化がいつそう進むなか、有機 JAS マークを見て購入する消費者を増やすことだけを考えず、むしろ有機農業にじかに触れたり、農家の人と話しをしたりしながら、有機農業を理解する消費者を増やしていくべきだろう。

2. 「有機 JAS 非取得」農家の取り組みについて

魚住道郎氏 日本有機農業研究会 副理事長/魚住農園 代表
茨城県石岡市 有畜複合経営

(1) 甘利大臣は先日、TPP 合意し、農業分野では競争力を付けて海外に売り込むんだ、ということでもないことを、勝手にどんどん決めて行っている。これを進めると、現状の自給率 39% しかないのに、手足をもぎ取られる思いだ。私は有機農業の立場で、日本の農業を何とか立て直したいと思っているのに、工業優先、商業優先の国策によって、日本の農業、農林水産業が根幹から崩れてゆくような気がする。市民、労働者の皆さん、農業、漁業に携わる人たちが、この風土、農業・林業を守る闘いを組んでいかないといけない、という思いでここに立っている。

(2) 私は 1970 年に農家になる前に、農業技術者として海外に出ようと、思っていた。しかし、その頃の農業は、農薬、化学肥料で大きな問題を引き起こしていた。これを克服しないで海外に出ていくことは、おこがましいことと思ひ、日本の農業をまず立て直し、農薬、化学肥料に頼らない農業を確立して、その考え方と技術によって貧しい低開発国の農業支援に貢献できると思ひ、まずは日本の有機農業の立て直しを考えた。

(3) 1974 年に茨城県八郷町の「たまごの会」に参加し、7 年間の共同生活し有機農業を実践し、1980 年に独立した。共同体からものを言うのではなく、一軒の農家として独立した農家でない

- と、ものが言えないと思って、今日まで取り組んできた。現在は耕作面積 3ha、平飼いで 600羽の鶏を飼っている。
- (4) 野菜中心に、大豆、小麦、小豆、胡麻、落花生、等、あらゆるものを作っている。水田は 15a で自家用。3 町歩 (ha) のうち、1 町歩を所有、2 町歩は借用。これは農家が、飯が食えなくなって勤めに出て、農地が空いているから。
3 町歩で有機農業をやることを実証してみたくてやっている。
- (5) 1970 年に農業大学に入ったが、アルバート・ハワード『農業聖典』は既に翻訳されており、ここで近代農業の行き詰まりへの解決策が示されていた。これが世界のどこでも通用するのか、ということでこれを検証しようと有機農業を始めた。この 45 年間、有機農業をやってきて、ハワードの理論はまったく狂いが無い。
- (6) 近代農業、近代農学は戦後、産めよ増やせよの中で、農業の中に工業の発想がどんどん取り込まれて効率一辺倒の、小農的にいろんなものをやるのではなく、分業して効率を高める方向に進んだ。今の TPP はさらにその先を行こうという発想である。
- (7) これに対峙する考え方として、有機農業は、分業的ではなくて、有機的で総合的で、持続性、多様性のある農業、しかも身の丈の人間的な、お金で売り買いする分断の社会ではなく、人間的な付き合いの中で社会を作りたい、というのが有機農業の考え方である。
- (8) 1971 年に有機農業研究会を一楽照雄さんが立ち上げ、共に今日まで作り上げてきた。ある意味で、生産者と消費者の独立宣言、流通からの独立宣言、安易に流通組織に依存しない、絡め取られないという精神を我々は身に着けるべきである、と一楽さんは論じた。自給、本来、食べ物は自給するもの、工業製品はいくらあっても飯は食えない、機械を食べて生き物は命をつないでいけない、農産物、水産物、畜産物でしか命をつなげない、ということを中心に考えること、それがあって、先のことが考えられる。
- (9) 生産者と消費者が、お金での売り買いを超えた深い関係を作れないのだろうか、自給農縁、生産者と消費者が人との縁を作りながら、今の都市と農村が分業の棲み分けではなく、もう一度都市の人も耕せる土地を持ちましょう、というのが私の自給農縁のイメージである。
- (10) ハワードの教えは、家畜や作物が健康に育つための家畜、作物の育て方を教えてくれた。生産効率や単収の向上とは全く違う。生き物が生き物らしく生きるための、アジアに学んだ堆肥を中心にした農業を提案している。
- (11) 有機農業者の中には、一番大事な根幹の堆肥は、必ずしも自分で作らず、農協で買う、袋に入ったものを買うという人もいる。わずか数十年前、農家は牛や豚を少頭数飼い、鶏を少羽数飼い、家畜堆肥を作っていた。落ち葉を山から集めたり、草を刈って堆肥にしていた。それが今の農村では全く見られなくなった。
- (12) 私の鶏小屋の中で堆肥ができる。2.3 間の一部屋で、1 回取り出すと 3 トン、年 2 回取り出し、この部屋が 8 部屋あり、かなりの量の堆肥が取れる。3 町歩の畑の肥料には、600 羽でぎりぎり間に合う量。ぎりぎりがちょうどいい、過剰にあると、いろんな欲が出てしまうから。
- (13) 野菜ばかり作っていると、肥料はいっぱい入るが、大豆や小麦、小豆やさつまいもを作るには、堆肥が多いと、さつまいもはおいしくない、小麦、稲は倒れる、となり、そこそこでないと作れない。
落ち葉は雑木林で消費者と集める。4 日間で 7 トン集めるのに、延べ 60~70 人が参加している。
- (14) 糸状菌や放線菌が土壌微生物にたくさん含まれており、これらが抗生物質を適当に排出して

- くれてブロックしてくれ、作物を健康に育ててくれる。これを生かすために、健康な堆肥を入れ続けることが重要だ。
- (15) 3.11 では放射能で汚染された有機物を使うのはけしからんというのが一般の考え方であったが、有機肥料を使った方が、農産物へのセシウムの移行は少ないという結果が出ている。チェルノブイリでは、有機肥料の利用で、農産物の放射能が 76%減少したという報告書が出ている。これは、有機物を使った方が、農産物への放射能移行が少ない、使いなさい、というものだ。
- 放射能の土壌汚染は頭にあるが、私は、国の規制以内なら、積極的に有機物を使うべきだと思う。実際に農作物の検査をしてみても、野菜に関しては、測っても放射能はほとんど出てこない。大豆も 3 ベクレル/キログラムのレベル (参考— 日本の国の基準値: 100 ベクレル以下)。
- (16) ハワードの考え方は、病気や害虫が出るのは、その農法が間違っている、と教えてくれているのだという考え方である。本来、作物も家畜も健康に育つ。健康な作物は病気にならず、害虫もほとんど来ない。病気になるのは、育て方がよくないということだ。
- (17) 今の有機農家はネットを張って、ネットだらけになっており、有機らしくない、世間に見せられない姿になってしまっている。しかし、それは本当の有機農業の姿ではない、と思っている。
- 私は、幼少期、赤ん坊の時はネットで保護しているが、畑に苗を持ちだしたら、基本的に何もかけない。ネットをかけると蜂が入らず、有機農業的な自然との共生を遮断してしまう。私の畑のブロッコリーでは、作物に病気を起こす害虫が、何もしないのに、どんどん死んでいる— これは、土壌中に住んでいる菌の中には、害虫に病気を起こす菌が住んでいるからだ。
- (18) 真竹を使っての道具で、苗作りしている— 軽快作業で疲れにくい。
- 水田の初期の芽の除草には、改良熊手を使い、こういう道具で、素人の誰が援農に来てききれいに植わる作業ができるように工夫している。
- (19) 私は 100 世帯の消費者に支えられ、野菜を 1 年中作っている。
- (20) 1996 年から国は GM (遺伝子組み換え) のトウモロコシや大豆の輸入の許可を与えてしまった。これ以降、鶏の餌は国産に切り替えた。かえって、卵の味、肉の味は良くなった。
- (21) TPP でくじけるのではなく、TPP をバネにして、強い自給的な、強い農業を組み立てられるのではないか、と思う。小規模で分散化することだと思っている。
- (22) 鶏小屋：床は鶏が自由に動き回り、臭くない— もみ殻だとか、雑草混ぜている。ここが堆肥づくりをやってくれている。
- (23) 広葉樹が土中の鉄分を含んで海に運び、海に餌を与えている。有機農業は、海に有機の餌を与えて、同様に沿岸が豊かになり、漁業がよみがえる。
- (24) 年間、150 人から 200 人 (延べ人数) が援農に来ている。来ている人達は、人助けでなく、売り買いでもなく、また、有機ビジネスでもない、自分の農園として作りに来ている。それに農民が応える。
- (25) 魚住有機農学校もある。慣行農業から転換を凶ろうという人も来ているが、こういう人にも、おーっ！と言わせるものがある。
- (26) 食を大事にする保育園に、ほしいものを最優先でお分けしている。保育園では味噌も作っており、子供たちも参加している。そうした自給をだんだん上げていこうにしたい。こうしたところからも、有機農業を若い人達につないでいきたい。

第二部 パネルディスカッション：

～有機農業の多彩な取組みを学び、将来を論じる～

・有井佑希氏 有井農園 代表/埼玉県小川町、NPO 霜里学校 理事

- (1) 小川町は有機農業では有名だが、金子美登さんが40年前から有機農業を始めた。私もここで研修を始めた。金子さんの農場での弟子や孫弟子が多く、今、生産者が60～70名くらいいる。隣接の町にも増えている。
- (2) 直売場や有機農業のレストランにも野菜を置いてもらっている。スーパーのヤオコー（小川町が創立の地）の4店舗にも小川町有機野菜コーナーがある。
- (3) 小川町の有機農家は、みんな小規模の農家。有機JASマークを取っている農家は、ほんのわずか。
- (4) 私は、畑は1ha、少量多品目の生産。
- (5) 小川町の有機農業は協力者が増えていて、隣接町の豆腐屋さんが、小川町の地大豆をつかって、1丁300円の豆腐をつくっているが、東京からもたくさんこれを買いに来ている。
- (6) 金子さんの生まれ育った下里地区では、農家がすべて有機農業になり、点から面の有機農業地区になって、平成22年には農水省の村づくり部門の天皇杯を受賞した。
昨年、天皇皇后両陛下が来られた。
- (7) 私は師事して5年目で、34歳になる。
- (8) 田んぼは2反、1反は自給で、もう一反は酒米を作っており、冬の間は蔵人として、酒造りしている。
畑は1町歩で、金子さん同様に少量多品目生産している。いろんな野菜を少量作り、販売している。
- (9) 肥料：使っているのは、自分でぼかしを作ったり、自分では肥料作りできないので、近くの牧場等を回っている。
- (10) 販売は、野菜ボックスで1,500円、送料込みで2,000円、月30箱くらい、また、2か所の直売場に共同出荷している。
- (11) アルバイトとして、週1回、福祉施設で働き、そこのレストランで野菜を置いてもらっている。
- (12) JA直売場には、なかなか有機農産物は置けない、重鎮が、農薬勉強会に入れ、とか、無農薬と書くな、とか、言われる。
- (13) 道の駅「小川町」は県なので、館長に理解があり、ここに有機のコーナーができた。
- (14) 6軒の若手農家で東京のレストランに共同出荷したり、地元保育園に出し始めている。
- (15) NPO 霜里学校で、機械の入りにくい耕作放棄地を都会の人につなぎ、手作業で農業をやりたい都会の人にマッチングし、マイ米（マイマイ）田んぼと、有機野菜塾をやっている。たくさん農地を一人でやることの限界を感じており、こういう形で、土に触れたいという都会の人とマッチングしてゆけば、中山間地の機械の入らない、使えない農地が逆に自然環境を守ったり、景観を守ったりすることになるのでは、と思っている。

・明石誠一氏 明石農園 代表/埼玉県三芳町 無肥料自然栽培を実践

- (1) 埼玉県三芳町の明石農園、池袋から電車で30分のところ。
- (2) 東京板橋の出身で、就農して13年目になる。2002年に研修、2003年から自分の畑に取り組んでいる。
- (3) 新規就農は生計立てるのが難しいと言われており、これを覆したくて、13年前に就農した。
- (4) 子どもは3人いる。2013年には家を建てた。
- (5) 農業には、妻と両親と叔母とスタッフ1名、そして研修生として3人(週2日、3日とかが今回多かった)。
- (6) 今までに、研修しての就農が、6,7名。出荷日(週2日)に障害児の親の会の母親二人にパートとして手伝ってもらっている。精神障害施設のスタッフにも手伝ってもらっている。
- (7) 今、41歳。2002年から自宅から通える農園で研修を1年受け、2003年に新規就農。2004年、足立区の都市農業公園にサッカーのご縁で魚住さんから声掛けあり、そこで有機農業のプロから教わった。2006年に結婚した。
- (8) 畑は。現在、1町9反に広がった。有機栽培で入って、2008年に無肥自然栽培に転換、今は肥料を入れない栽培をやっている。
- (9) 10軒のお客さんからスタート(母親の友人だが)した。これを100軒のお客さんにしないと生活が成り立たない、どうしたら100軒になるかと考え、10軒のお客さんが満足しないと、100軒のお客さんは満足しない、と思い、アンケートを取った。その年、いきなりロコミで15~20軒くらいを紹介してもらった。チラシ、広報活動せずに、今は、100軒くらいのお客さんに、去年くらいになった。
- (10) 最近、ホームページ作ったので、そこからのお客さんも多くなった。
- (11) 肥料なしで育つか、と言われるが、土の中の微生物が腐食をたくさん作ってゆく。土は虫の「うんち」でできている。野菜くずや雑草を積んでおくと、1年で完全に土になる。この土が畑でたくさんできれば、野菜が育つというのが、私の自然栽培の理解の仕方である。6年間なにも入れないと、野菜が育つものと、育たないものがあり、植生遷移の考え方から、草を生やすと管理がたいへんになるので、緑肥(栽培している植物を、収穫せずそのまま田畑に鋤きこみ)を入れると、野菜が育つ。何も入れない小麦畑は、育たないが、ライ麦を撒いて鋤きこんだところの小麦は、しっかり育っている。こういうのをを使って野菜を育てている。
- (12) 消費者とのつながりは、個人宅配、農業体験スクール「ソラシド」をやっている。消費者自らが野菜作るのがよい、腑に落ちる体験学習。ジャガイモ掘り、夏野菜、秋野菜、林の下草刈り体験も。
- (13) 農業と福祉のつながり、融合できるか、ものをつなぐのがお金と考えて取り組んでいる。
- (14) 畑には、いろんな虫や微生物がいないと育たない、生物多様性がないと育たないが、人の社会も全く同じであり、多様でないといけなく、障害者が見えないのではなく、障害者が普通にいる社会システムが、これから必要なのではないかと、そう思っている。

・参加者との議論

(問1) まわりが農薬を使う場合、有機農業への影響はどうか。無農薬と言いつけられるのか。

⇒

(魚住氏)

- ①有機農業には腐植が重要と申し上げたが、腐植は農薬を吸着する力がある。私達が借りた畑が、除草剤、殺菌剤、殺虫剤を使っていたとしても、腐植が作物への移行を防いでいることも事実である。
- ②周囲からの農薬散布で流れてくる、それは確実にあり、ないとは言えない。しかし、我々は彼らとは、そこで共存しないとイケない。地域の中で、私の生き方を地域に表現してゆき、地域の中で理解されてゆくことを静かに思っている。
- ③私達の町でも、有機農業が私達から発信されて、金子さんたちのグループに匹敵するくらいに農家軒数は増えている。外からの新規就農者が入ってきて、耕作放棄地を借りて有機農業のエリアが増えている、静かな変換が起きている。
- ④お前の農薬が流れてくる、と言ったら、農村では大きな衝突が起きる。農家として存在していることに、相当な価値があると思っている。国土を守る、村落を存続することにも重要なことだから、共存しないとイケないし、共存していこう、と思っている。

(有井氏)

放射能の問題と同じで、みんな同じ空気を吸って、同じ地球に住んでいる。日本の狭い国土で農薬が、というところから有機で、となつて、難しい。私達は0.4%と、超々少数派なので、難しい。しかし、若い人の新規就農が増えてきており、有機農業が将来どーんと増えていくのではないかと思っている。

(明石氏)

ほとんど魚住さんに言ってもらった。農家が毎年大きく減っている、という大きな問題も考えないとイケない。隣の農薬は、サポーターに理解してもらい、将来はこの地域が、点から面になるようにしたい。

(久保田氏)

消費者に来てもらって、見てもらい、交流して理解してもらおうことで、増えている。地道に理解を深めて増えていくという活動こそが重要なのではないかと思っている。

(問2) 3反5畝の農地を耕作。無農薬米をキロ600円で売っている。スーパーでは200円で米を買える。有機米を買うのは金持ちばかりだ、と言われる。このジレンマをどう感じるか。

⇒

(久保田氏)

高級な店舗に高価な有機農産物が並んでいる、ということは、なくもないが、生産者と消費者の提携の場では、必ずしも高いわけではない。

(明石氏)

私たちは固定価格でやっているのだから、スーパーと逆転現象もある。お金を持っている方がお客には多いと思うが、貧しい子ども向けの子ども食堂に野菜を寄付しており、お金のある方から、ない方に流すという中間的な役割も担えている。

(有井氏)

- ①お米を自分で作ると売りにたくなくなる。1俵、6千円、7千円とかのJA買い取りで、大きい農家からどんどんやめてゆくと思う。私はキロ500円で売っている。これは顔見知り、つながりの中で売っている。市場だと金持ちが買うということになってしまう。
- ②私は、ヤオコーや道の駅で出しているのは、スーパーと同じ価格で出している。当たり前の、

手が届く価格で出すことによって、買ってもらえる。流通すると、大根 100 円価格だと、農家には 30 円、しかし、私達が道の駅で売ると、9 割もらえる。キロ 500 円の米を買うのは、健康になることに価値を見出し、所得の高低ではなく、購入している。私自身は、所得は低いが、出る分も少なく、豊かな生活をしている。

(魚住氏)

- ①先ほど、生産者が流通からの独立宣言と言った。普通の農家は、自分で作ったものを自分で価格を決められない。市場に出すと、産地間競争で潰し合いをやっている。こういう原理の中に、食べ物を置いてはならない、と私は思う。
- ②本当にいいものを生産者と消費者が作っていく協働の活動が、我々の有機農業の原点であると思う。一番影響を受けにくいのが提携、当たり前生産方法で、当たり前価格を認めてもらう、これが提携である、と思う。
- ③認証制度では、認証マークを付けて出荷するという事で、不特定消費者対象に売るということであり、売れるか売れないか、わからない、売れなくなった時に困る。
これから安い海外の農産物が大量に入ってきた時に、有機農業者が生きてゆけるか、ということ。95%の農産物が関税撤廃になり、あらかたの物が関税抜きで入り込む。

(久保田氏)

農家も我々消費者も運命共同体という共通の地盤に立って暮らしているという意識が必要。。

(問 3) (参加者の水野玲子氏より) 有機農業の拡大のためには、魚住さんの言われていたように、保育園に有機農産物の提供が広がっており、さらにはこれが給食になればさらに広がると思う。子どもたちにも有機農産物の味がわかるようになる。

(問 4) (モデレーターの久保田氏より) どうやったら有機農業が拡大するのか。なお、ローソンでの有機農業の連携の動きをどう考えるかという質問もきています。

⇒

(魚住氏)

流通業者が有機農産物を買ってくれるようになると、生産者もそこに出すようになる。流通業者は自分に都合のよい時は、利用する。しかし、海外から安い高品質のものが入ると、一気に切られてしまう。ずっとそのようにやられてきて、農民が結局、労働者化されてしまった。一村一品運動はその象徴だと思う。本来、その地域のもつ多様な生産物を作る潜在力があるのに、ミカンしか作らない、リンゴしか作らない、となった。豊かな自給ができるのに、他に高く売りたいがために、他の産地を蹴落とすために、そうになってしまう。その動きに参加しているのか。

(明石氏)

今は自然食品店に卸しているが、切られたときに困るので、最初は個人宅配を始めた。ベースを確保した上で、卸や加工をやっている。

(問 5) 東京オリンピックの有機農産物需要 (組織委員会から有機農産物の提供要請が出ている) にどう対応してゆくのか。

⇒

(有井氏)

金子さんのところで会を立ち上げて、オリンピック委員会と話が進んでいる。

(問 6) 私は 40 年間、農業の研究をしている。工芸品を作っているのか、工業製品を作っているのか。量的には、1 億 2 千万人に有機農業は絶対無理。ニッチな世界で世界に冠たる工芸品を作ったらどうか。

⇒

(久保田氏)

工業製品のような農産物への反省から有機農業がでてきた。農家という時の「家」とは、芸術家の「家」と同じ。作品であるとも言える。

(参加者の農林水産省有機農業推進班課長補佐 町口和彦 氏)

勉強で参加しているが、

- ①消費者にどうやって売ればいいのか、については、化学合成農薬は使っていません、と伝えてもらえれば間違いはない。
- ②既に有機農業で（反収）6 俵、7 俵穫れる方が、600 円なら、新規の有機農業者は、5 俵、6 俵、下手したら 3 俵、4 俵である。この新規の方々は、600 円を超えられないことになってしまい、新規有機農業者の生活が成り立たないことになる。個人的見解だが、700 円、800 円で売れるなら、どんどん売ってほしい。
オリンピックはチャンスとして、期待している。

(問 7) (モデレーターの久保田氏より) 最後に一言ずつ。

⇒

(明石氏)

小さく動く部分と、大きく動く部分と分けて考えるが、すべてつながっているので、自分のやれることに取り組んでいく。

(有井氏)

小川町にぜひ来て見て、大地のエネルギーをもらってほしい。

(魚住氏)

1 回目の東京オリンピックは 1964 年、近代化を誇示したが、水俣病の公式確認が 1956 年に起きている。今回、福島原発事故が起きた、安倍首相は、アンダーコントロールと言って嘘をつきながら、東京オリンピックをもぎ取ってきた。これで東京オリンピックは、オーガニックで豊かに飾れるのか、と思っている。フクシマをオーガニックの里にする、くらいの気持ちで、東京オリンピック開催なら、私も賛成する、
しかし、そうでないのなら、フクシマは、水俣同様に忘れ去られる、お祭り騒ぎで、生産者も消費者も浮かれてしまう、これに私は便乗できない。フクシマに背を向けて、有機農業の運動は進められない。

以上